

## 安部公房『第四間氷期』覚書

——マンマシン・システムに関する三つの「論理」的態度——

永野宏志

### はじめに

「人間と機械の関係はどうなるのか。」——コンピュータ環境に生きる現代の問いは様々な予測を生み出している。だが、人工知能が人間の知能を追い越すという予測が不安を与えるものだとしたら、人間と機械の関係、マンマシン・システムに関して<sup>①</sup>どんな技術革新があり、それに対してどんな態度がありうるのかという日常的な考察を曖昧にしたままIT社会に呑み込まれているからかもしれない。一方、初期コンピュータとファーストコンピュータを果たしたという安部公房が『第四間氷期』（一九五八・七一—一九五九・三『世界』、一九五九・七刊行 新潮社）を書いた時<sup>②</sup>、現時点から見ればマンマシン・システムに関する二つの態度を示唆していたように思われる。つまり、語り手である勝見博士と彼以外の登場人物の態度である。発表当時、作者側に立った「動機」が議論されたのは確かである。が、その際も何らかの態度として議論された点は指摘できる。花田

清輝は「科学小説」というエッセイを推理小説雑誌『寶石』に連載する中で（一九五九・十二）、安部公房『第四間氷期』に言及し、推理小説と同様科学小説が風俗小説に墮さないような「思想的な動機」をこの作品に見出そうとしている。「思想的な動機」を、当時安部がブレヒトの演劇的な異化効果を小説のみならずラジオ、テレビで試みていたことを考慮すると、その背景を想像するのはそれほど難しくない<sup>③</sup>。だがここで注目したいのは、「動機」ではない。むしろ推理小説雑誌に掲載されることで生じた文脈にある。なぜなら、花田にとって推理小説の論理は「科学小説」つまりSFにおいても重視されるからである。

最近、推理小説の領域において動機が問題にされているのは、けっこうなことであるが——しかし、科学小説の領域においても、同様のことが、さらにいっそう声を大にして、強調される必要があるのではなからうか。もっとも、その動機なるものは、かならずしもいっばんにいわれているように、金銭だとか、愛欲だとか、

名誉だとかといったような日常的なものでなければならぬとは、いささかもわたしはおもわない。いや、むしろ、それらの動機に、むやみに拘泥することは、かえって、推理小説や科学小説を、世のつねの風俗小説に墮落させてしまうおそれがないでもないのだ。

したがって、わたしは、このさい、右のような知的な小説のジャンルにおいてなにより注目されなければならないのは、『第四間水期』のなかで安部公房の描いているような思想的な動機であると考えるのであるが、如何なものであるか。(『科学小説』)

確かに花田がこの作品から抽出する「思想的な動機」は物語世界内での登場人物の「動機」ではない。だが、一方で、「未来は、そのような危機の認識の上に立ったフランケンシュタインの手によってつくりだされた怪物である、水棲人間というものだ、というのが、安部公房の論理なのだ」(同右)と述べるように、その「動機」が「論理」において導出されると花田は述べてもいる。この「動機」と「論理」のつながりが、推理小説雑誌に掲載するための単なる前置きでないことは、このエッセイのすぐ前に書いた推理と娯楽性に関する「ヒッチコックの張扇」『キネマ旬報』一九五九・九)でも明らかである。花田は「エンタテインメント」と「無思想」を「論理」の有無の問題とし、『北北西に進路を取れ』のなかにも、大衆の喝采を博しそうなくだりは、いくらでもある。しかし、それらのシーンなり、シークエンスなりをつらぬく赤いアリアドネの糸強力な論理が、ほとんどまったくといっていいほど、みとめられないのである。

る」(同右)というのである。

「思想的動機」という態度に関わる花田のこの批評は、『第四間水期』を「論理」の領域において読む契機を与えるように思える。この点を踏まえて、本論では「論理」を作者から登場人物間へ、そしてできるなら作品を包む実際世界へと移行していくことが課題となる。

なお、本稿は『第四間水期』のマンマシン・システムの部分に焦点を絞り、水棲人間に移行するバイオテクノロジーに関する記述についてはひとまず検討の外に置き、論理の面でも勝負博士の代表的なバイアスを取り上げるにすぎない。それゆえいまだ「覚書」に留まることになる。

## 一 「裁判」と「テスト」

『第四間水期』を読む読者は、初読の際にも再読する感覚に襲われる。この感覚が後半の「プログラム カード No. 2」の章以降に強まるのは、登場人物たちが「予言機械」の予測した未来の側から今語りつつある現在をも既定のものとなし、事実を確認するかのような会話を繰り返すからである。この構造によって読者は前半の様々な出来事を遠い過去であるかのように想起する。こう考えれば、『第四間水期』の前半と後半は問題と解決と捉えることが可能であり、推理小説の構造をそこに見出すことも可能だろう。だが、既定のものとは過去ではない。さらに、この作品では問題と解決の両者を、作者の言葉に従うかのように「断絶」<sup>5)</sup>させるといふ特徴がある点にも

注意する必要がある。というのも、物語世界ではこの「断絶」は、問題を解決しようとする勝見博士の「論理」のみに起こるのであり、他の登場人物にとっては論理的に予測された選択肢の一つの実現にすぎないからである。言いかえれば勝見博士以外の登場人物が新たな情報を得ることがないのは、勝見博士の意識も行為も「予言機械」によって予測され、彼が解決しようと思ひ浮かべるヴィジョンもまた彼が行動に移す以前にすでに知られているからである。

物語世界では、現在を「予言機械」の予測の実現と見なす登場人物たちの「論理」によって勝見博士の「論理」が区別され、博士の「論理」自身を「日常的連続感」としてその本質を抉り出し、その「連続感」から導出される未来を「断絶」させる別の未来を導出する。「論理」の存在を示すという対話が主である。一方、読者が作品を読む次元では、この作品前半の一人称の語り手（勝見博士）の「論理」に従い、その後半では語り手と他の人物や「予言機械」との対話を書物の線状の時間に沿って辿ることで、前半部分を過去として認識する。読者と語り手勝見博士の接点は語り手の「論理」の時間と書物の時間に共有される物語の線状性にある。それゆえ読者は、それとは別の「予言機械」や他の登場人物たちが作り出す「論理」と時間が、彼らが作者「あとがき」と同じ「断罪」の側のもののように解釈するといえる。

二つの「論理」における齟齬は、具体的な作品構成では「プログラムカード No・1」と「プログラムカード No・2」の章の間に起こる。以下の引用部を初読する場合、強い詰問のトーンを帯

びた研究員和田勝子の言葉が負っている背景は一人称の語り手である勝見博士と彼から世界を享受する読者には与えられない。

和田が立ち上る気配がした。私は何かをじっと待っていた。沈黙に耐えられなくなつて、振り向いてみると、彼女は見たこともない固い表情でまっすぐ立っている。なんでもいから、言おうとして、言葉をさがしていると、彼女のほうから口をきつた。「はつきり答えていただきたいわ。私、先生を裁判しようと思つているんです。」

私は笑つた。意味もなく笑いだした。すると彼女もかすかに微笑んだ。

「君は本当に妙な娘だよ。」

「でも、裁判なんです。」と真面目な顔にもどつて、「それでは、先生は、胎児殺しを罪だとはお考えにならないのですね?」

「そんなこと、考えていたら、きりがなさ。」

「じゃあ、先生は、自分の未来を予言機にかけてみる勇氣なんて、とてもおありにはならないわね。」

「どういう意味だい?」

「いえ、もういいんです。」

(20 「プログラムカード No・1」)

「裁判」という強い口調に、彼女の勝見博士に対する態度や性格を読み取るとしたら、この語が強調の修辭として読まれるからだろう。一方、彼女が「予言機械」の予測結果を念頭に勝見博士の言葉を既定のものとして把握している背景が与えられれば、「裁判」な

る語は「予言機械」の論理の実現を検証する「テスト」開始の言葉であると解釈できる。「プログラム カード No・2」ではこの「裁判」の言葉の背景が加えられる。

「未来に……断絶した未来に、どれだけ耐えられるかのテストだったんです。というより予言と予言機械そのものとの、どちらにより関心をもっているかを、ためしてみたんです。もちろん、先生にも、一応のテストはしてみましたわ。おぼえていらっしやるかしら……?」

そう言われれば、そんな気もしないではない。具体的なおこしは思い出せないが、ひどく荒唐無稽なことをいう娘だと、おかしく思ったおぼえはある。私は何か言い返そうとしたが、舌のつけ根に力が入るばかりで、まるで答えにならない。

「でも、先生は、駄目でした……先生は、未来が現実を裏切るかもしれないなどという可能性は、まるで考えてみようともなさらなかった。ということは……そうね、どういったらいいかしら……つまり、予言機械は、質問をうけなければ、答えることはできないわけでしょう。自分から質問を考え出すことは出来ないわけね。だから、予言機械を本当に使いこなすためには、むしろ質問者の能力が問題になってくる。その点で先制には質問者としての資格が、ぜんぜん欠けていたように思えるんです。」

(32 「プログラム カード No・2」)

物語の時間では、「裁判」という言葉が告げられる時点は「テスト」という言葉が告げられる時点から見れば過去であり、同時に読者が

書物のページをめくることが知識を増していく直線状の時間の上にある。一方、「予言機械」の予測をすでに織り込んだ和田の時間は、仮説の検証、可能性の現実化からなる「論理」の時間であり、予測された時点の知識量自体は不変である。注意したいのは、「機械を考えさせるためには、プログラム・カードという、機械の言葉で書かれた質問表をあたえてやらなければならない」という「プログラム カード No・1」冒頭のエピグラフを復唱するように、和田が「予言機械は、質問をうけなければ、答えることはできないわけでしょう」と勝見博士に質問者の能力を問う言葉にある。この場合、「予言機械」が作り出す時間は直線状ではなく、質問によって幾通りでも変わりうる確率的時間として解釈されていることを示唆する。言い換えれば、和田の言葉は、勝見博士を「裁判」にかけると言うときは、博士が質問表を変えて、別のプログラムによって「予言機械」の予測を別の未来に向かわせるように促すのに対し、「テストだったんです」と言うときは、当の別の未来は現実化せず、可能性に留まったという複数世界を想定した時間を前提にしているのである。

さらに和田は「プログラム カード No・2」の冒頭の「プログラミングとは、要するに質的な現実を、量的な現実に戻元してやる操作である」というエピグラフを繰り返して、勝見博士と「予言機械」の論理自体が異なる点を厳しく指摘する。

「先生は、プログラミングにかけては、最高の専門家かもしれないませんが、プログラミングというのは、要するに質的な現実を、量

的な現実には還元するだけの操作ですね。その量的現実を、もう一度質的現実と総合するのだから、本当に未来をつかんだことになりません。分りきったことですが、先生は、その点でひどく楽観主義的だった。未来をただ量的現実の機械的な延長としてしか考えていなかった。だから、観念的に未来を予測することには、強い関心をよせられたけど、現実の未来には、どうしても耐えることができなかった……」

(32「プログラム カード No・2」)

問い詰められるのは勝見博士の「機械的延長としての未来」に対する「観念的」な「楽観主義」だが、その際「予言機械」を信頼する彼女にとって、博士こそが「機械的」であるという解釈は注目し得る。和田は博士の「論理」を「予言機械」側から批判するだけでなく、「予言機械」の予測の「現実」への応用に関わる実践面において批判するからである。読者は、「予言機械」の予測結果を実践面に応用しないことから「観念的」と呼ばれる点については勝見博士の発言から理解する。一方、彼の「論理」の「機械的」性質についてその詳細は告げられない。しかし、ここで勝見博士の「論理」が浮き彫りになっている点に注意したい。というのも、彼が「機械的」と呼ばれるその「論理」の性質が「日常的連続感」を構成する当のものだからである。

この二つの「論理」の齟齬が、作者のいう「有罪の宣告」(『第四間水期』「あとがき」としての異化効果の仕掛けであり、その仕掛けが花田のいう「思想的な動機」から発するとするなら、勝見博士

の「論理」に読者の読みが従う理由、すなわち、ここまで推理小説の「論理」と呼んできた博士の「論理」と読者が慣れ親しんでいる「論理」の関係を検討する必要がある。

## 二 推理の「欠陥」

『第四間水期』での「論理」という言葉は「予言機械」と勝見博士に冠され、両者の「論理」の排他的関係が異化効果を惹起すると考えられる。だが、両者が各々どのような「論理」を用いるのかという点については、いまだ「予言機械」を信じる和田勝子の「論理」を確率的とだけ述べ、勝見博士の「論理」については和田の解釈として「日常的な連続感」や「観念的」という言葉で区別したに留まり、「予言機械」の「論理」についてはまだ言及できていない。では、それらは各々どのような「論理」なのか。しかしそう問うと、真つ先の一つの問題が出てくる。それは、勝見博士の「論理」は論理的なのか、という問いである。というのも、勝見博士の言葉は「論理」に関わる様々な認知バイアスが多分に働いているように見えるからだ。語り手である勝見博士が常時寝不足で注意力を失い、怒りっぽくなることについては、読者も十分了解することだろう。だからといって彼が信用できない語り手でもないのは、立て続けに起こる様々な出来事に対して何らかの「論理」を働かせて推理しているからだ。だが、その質は、例えば助手の頼木によって簡単に覆されるほど脆弱なことも確かである。

「いかにも先生らしい、筋のとおった面白い推理でしたよ。ただ

「一点、これもいかにも先生らしい欠陥をべつにすれば……」  
「欠陥？」

「欠陥といって悪ければ、盲点といったほうがいいかな……」  
「言いのがれは無駄だよ。ちゃんと機械が記録してしまっているんだ。」

「まったくです。それじゃ一つ、機械に判定してもらってみることにしましょうか……」頼木は機械に向って坐りなおし、ボタンを操作しながら、マイクの中に呼びかけた。「判定準備。」

青ランプ……準備完了の合図である。

「ただいまの推理中の欠陥の有無。」

赤ランプ……欠陥ありの合図である。

頼木は出力装置をスピーカーにつないで、さらに質問を重ねた。

「欠陥の指摘をして下さい。」

間髪をいれずスピーカーをとおして機械が答えた。

「最初の仮説の立てかたに飛躍があります。胎児売買の知識の有者であれば、死体分析の結果にその問題がふくまれていることは、予知できるはずです……」

(21)「プログラム カード No・1」

以上は、二つの「推理」が並列され、勝見博士の「推理」の「欠陥」または「盲点」が指摘されると同時に、「最初の仮説の立てかた」によってその「論理」の導出する結果も変わりうる点を示唆する場面である（加えて、「予言機械」もまた人間の打ち込む「プログラム」次第で予測を変えろという和田同様の頼木の解釈も示される）。

ここで検討したいのは、勝見博士の「最初の仮説の立てかた」の「飛躍」の有無であり、もし「飛躍」があるならそれはどのような「飛躍」かという点である。この二つの問いが「予言機械」の側から指摘されるならば、間接的ではあるが、頼木との関係から「予言機械」の「論理」の輪郭も垣間見ることが可能だろう。おそらくそれは、頼木が殺人を犯すという「予言機械」の予測は、頼木がそれを知っているかも知らなくても、彼がそれを現実化する役割に回ることになると予測する強力な「論理」の輪郭である。

「予言機械」が「死体分析の結果に問題がふくまれている」というのは、殺された会計士の脳を「予言機械」にかけて死の直前まで再生したことを示している。そこで加えられた「知識」は「胎児売買」が存在するというものだった。この「知識」を得て、さらに自分の妻も会計士の愛人の女同様墮胎させられたことを知っているにもかかわらず、勝見博士はなお「胎児売買」の存在を否定する立場から「推理」を開始する。その点を「予言機械」は「飛躍」と呼ぶ。言い換えれば、「予言機械」は「胎児売買」の存在を仮定して「論理」を組み立てているのである。

一方、勝見博士の「推理」が「面白い」とされるのは、助手の上司へのお世辞とは別に、勝見博士の推理どおり頼木自身後に犯人であることが判明するからだろう。が、和田と頼木の間を恋人同士と誤解することで頼木が和田を巻き込んだと解釈する博士の「推理」が後に覆されるように、「面白い」という言葉は結果的に事実と該当する部分があるという程度の意味合いと理解できる。この引

用箇所では、頼木は、勝見博士より事実に対する情報量が多いのみならず「予言機械」の予測によって勝見博士の「論理」の「結果」をすでに知る状況にあったと、「プログラム カード No・2」の章で読者は知ることになる。つまり、頼木は博士の「論理」を再認する立場で聞き手になっているゆえに、上司の「論理」の「欠陥」も予測どおりとし、その「結果」を確認しているのだ。この引用部分からは、大量の情報から得られる「予言機械」の予測を信頼する頼木と対比することで、勝見博士の「論理」が少ない経験から得た情報を無理に拡大している点が読者に示されるのである。

さらに、勝見博士の「論理」が「飛躍」するのは、情報の少ない自らの経験に頼りすぎる（新しい仮説は排除する）という理由だけではない。短期間の結果に頼る傾向も確認できる。以下の引用は、会計士が殺された後、勝見博士の推理と頼木のそれが比較される場面である。

「女が戻っているかどうかを、問い合わせていたんですね。あの後の素振りからおせば、返事がノオだったことは疑う余地がない。」

「しかし、そのあと、先回りして戻っていたとしたら？」

「じゃあ、なぜ、部屋が暗かったんです？ ……倒れた音はなんですか？ ……点いてすぐ消えた明りはなんの意味ですか？ ……」

「君が、何を言おうとしているのか、よくは分らんが、ともかく本人が自首して出ている以上……」

「いや、警察はそれほどのろまじゃないでしょう。下の部屋の者が、あの物音を聞いた時間を覚えているかもしれない。隣の者が、ずっと明りが消えていたことを証言するかもしれない。あるいは、締められた首の跡から、それが女の仕業ではないことを割り出すかもしれない。そして一旦疑いをもてば、とことん調べ上げるでしょう。廊下についている、靴下の跡……ドアのわきの、壁の指紋……それから問題の、あやしい尾行者……」

「君は……そんなところに、指紋を残したりしたのか……」

「多分ね……こんなことになろうとは、夢にも思いませんでしたからね。」

「ふん……しかし……しかし、そうなくても、調べてもらえばすぐに分ることだ……馬鹿々々しい。大体、動機がないじゃないか。疑おうたって、第一証拠がない。」

「そりゃそうです。しかし、やっぱり、疑うでしょうね。ほくらの仕事の内容を、連中がはつきり納得してしまうまでは……」

「そりゃまずい！」

「そう、ものすごくまずいんですよ。」

(10 「プログラム カード No・1」)

この引用部も先ほどの引用部と同様、博士の「仮説」がすでに間違っていることを示す。博士はこの事件では自分は観察者であり当事者ではないという「仮説」を立てる。それゆえ、博士は当事者の可能性を仄めかす頼木の言葉に反応するだけで自らの経験データを掘り起こさず、さらにこの事件が波及する未来の範囲を、自分を含

まない可能性のみに限定する。一方、「予言機械」の予測を念頭に博士の言葉を聞く頼木の「論理」は、博士の「論理」の「欠陥」を指摘し、事件の当事者の側に博士を引き込もうとしていると理解できる。こうして博士の「仮説」を変え、「予言機械」が予測する博士の死を回避するのが彼の目的だったと後に明かす場面が彼の言葉の動機を補足する。だが注意すべきは、頼木も和田と同様「予言機械」が入力される「仮説」次第で予測を変えろという点にある。彼らにとつて「予言機械」は「プログラム」の作成を自分で行なわず、それを実行して計算処理する機械と理解されているのである。

では、「仮説」を変えない「論理」がなぜ和田が述べたように「機械的」なのか。この点では、人間の論理的思考が直観に傾きやすい性質を考える際に、勝見博士のような「仮説」の過ちを用いるという見解がある。一般に直観的思考は、自らの経験則のみで論理の順序だった手続きを踏み越え、一瞬にして結果を導出するという利点がある。一方、この論理は即断性を優先することで間違つた結論を導出する確率が高い。小説の中で論理が際立つ探偵小説ジャンルでは、探偵の論理に比較されるかたちでこの論理が出てくる。マリ・ア・ニコヴァはシャーロック・ホームズの論理を分析する中で、それを「ワトスン・システム」と名付け、「ホームズ・システム」と区別して、この「システム」が「自然で直感的」であるものの、まず第一に「物語」をつくりたいという願望<sup>1)</sup>によって「話を語ることに固執する」特徴があり、そして第二に、「説明する能力」を脅かす「不確実性や偶然、不規則性、非線形性などの要素」を「全

力で排除する」点があると述べる<sup>2)</sup>。

何かが起きた理由を説明するときであれ、ある出来事の推定原因を判断するときであれ、制御しやすく予測可能で、現実より因果関係がはっきりしていることを好むせいで直観が間違つてしまふのだ。

このような好みから、十分に再考をしない思考の誤りが生じる。ホームズが言うように、データに先んじて主張を展開してしまつたり、データと裏腹の推論をしてしまふのだ。

(二)脳という屋根裏部屋を操縦する―事実に基づく推理―  
「ワトスン・システム」は「つじつまが合っている」ことを優先し、「ほかの見方」の可能性を締め出す。これが、和田が「機械的」と非難した勝見博士の「論理」の本質である。そして、彼が締め出す「ほかの見方」とは、「胎児売買」の存在という「知識」を自らが生きる現在において受け入れることと自分が事件の当事者に含まれることである。この「論理」に依拠することによって、勝見博士は自ら開発した「予言機械」の予測を信じ、彼の「仮説」を反証し、別の「仮説」に置き換えるような「論理」にシフトすることができないのである。

もちろん、このような解釈は、読者が「プログラム カード No・1」から「プログラム カード No・2」を読み、さらに「プログラム カード No・1」を再読して可能となるだろう。それゆえ、初読の読者もまた、「プログラム カード No・1」での「物語」の「つじつまが合っている」ことを優先し、「プログラム カー

ド No・2」で「物語」を作る語り手である勝見博士の「論理」が批判される過程を辿りながら、「プログラム カード No・1」を再読する手続きを踏むことで「予言機械」を信じる頼木たちと勝見博士の「論理」のどちら側に自分自身が属するのを知ることが可能となる。つまり、『第四間水期』を読む読者は、自ら用いていた「論理」を異化し、自己批判する構造を受け入れることになるのである。

さて、ここまでの検討において、マンマシン・システムに関する二つの態度がある程度まで区別された、と考えたい。二つの態度とはすなわち、直感的な経験のバイアスのかかった勝見博士の「論理」と「予言機械」の予測を予め知ることによって人間としての直感のバイアスを最小限に減らすために確率的になった頼木たちのそれである。では、「予言機械」の「論理」そのものはどのようなものなのか。「予言機械」の入力システムが人工言語なのか自然言語なのかも不明であり、その論理も自然言語の音声で出力される言葉や、勝見博士以外の人物たちの言葉から推測するしかない。だが、おそらくそれは、頼木たちが考える「論理」とも異なるもののように思われる。

### 三 二つの態度

人間によって書かれた言語や録音装置を通じた人間音声によってプログラムを「飲む」「飲み込む」とされる以外、どのようなプログラム言語を用い、どのようなアルゴリズムをどのようにコード化

して入力されているのが明記されない以上、「予言機械」の「論理」がどうなっているかは、機械自身が音声出力する自然言語と、それを解釈し信用する頼木たちの言葉から推測するしかない。仮にあらゆる可能性をしらみつぶしにして最良の予測を引き出したというこの作品と同時代の初期コンピュータと比較しても、博士のデータはもちろんそれ以外のデータをも大量の「飲み込む」記憶容量があり、それを検索できる人間の記憶と類似したシステムがあり、さらに自然言語で流暢な音声出力する能力があると想定できる以上、現在でも困難な課題をクリアしているような人工知能として考える必要があるようだ。だが、ここで注視したいのは、その実際の構造や能力の正確な把握よりも、勝見博士の「論理」を批判する「論理」がどのようなものかという点にある。

勝見博士が音声出力装置をセッティングする際に自分の声を録音したその声で、「予言機械」はもう一人の「君」として、博士に向けて自身を以下のように音声出力する。

「おれには肉体がない。君が想像しているとおり、あらかじめ録音されたテープにすぎないんだ。むろん意識なんて上等なものを持つていないはずがないさ。しかし、意識以上の必然性と確実性をそなえている。君の思考の働きを、おれはすっかり事前にかけてしまっているんだ。だから君が自由にふるまおうとしてみたところで、いずれおれの中に予定されているプログラムから、一歩も出られないというわけさ。」

(29)「プログラム カード No・2」

この引用からすると「意識以上の必然性と確実性をそなえ」、勝見博士の「思考の働きを」「事前に知」ることが可能な「論理」が採用されており、偶然性と不確実性を排除できる「論理」と理解できる。一方、頼木たちが考えるように、「予言機械」自身がプログラムの実行であるかぎり、人間が入力するプログラム次第で変更可能という可能性もあるかどうかという点では、右の引用を見るかぎり、その変更も「おれの中に予定されているプログラムから、一歩も出ない」のであり、「予言機械」の言葉を信じるなら、人間であるプログラマーの変更可能性の範囲も予測していることになる。おそらく、他の夥しい情報を処理しながら、博士に向けて音声入力しつつその実行プログラムを確認するようなこのマルチタスク・マシンは、一見すると、ディープ・ラーニングをすでに行っているAIのように見える。苅部直によれば、「予言機械」の構想は計算機から人工知能へシフトしようとする「一九五〇年代のコンピュータの能力がしだいに人間の思考と表現に近づくという展望が開けてきた時期」を背景にしているとされるが、パラメトロン型電子計算機の基本設計を理解しつつ、当時のサイバネティクスの動向の中で「予言機械」が構想されたという点は注目すべきだろう<sup>2)</sup>。

ここから、頼木の言葉を「予言機械」と区別することが可能となる。勝見博士の「仮説」の誤りを指摘し、その「論理」を変更するように仄めかす彼が、「確率」や「期待可能」のような語を用いるという点で、「予言機械」の「意識以上の必然性と確実性」と比べて、まだ人間的な解釈に留まっているように見える。

「……もちろん、仮説にしかすぎません……しかし、仮に胎児売買が本当に行なわれていたと仮定してみた場合ですね、ぼくを犯人だと想定したときと同じくらい、いろいろと面白い結果が展開できるんじゃないですか……たとえば、最近の厚生省の発表でも、中絶胎児の数は出生児とほぼ同数で、年に二百万以上にもなっているらしい。ということは、胎児売買がありうるとして、それが相当大規模な組織で普及していることも、じゅうぶん考えられるわけだ。そうなると、われわれのえらんだサンプルが、こちらでは単なる偶然のつもりでも、けっこうその組織にむすびついている場合がかなりの確率で期待可能です。」

(21「プログラム カード No・1」)

プログラムを作る勝見博士の「論理」が変更可能なら、「予言機械」の「論理」も変更可能と考え、次章「プログラム カード No・2」で勝見博士が死なねばならないという「予言機械」の結論に向かわぬように博士を説得していたと告白する頼木は、ここで、人工知能には行為によって世界に参画する「肉体がない」のであり、その役割は人間が担う、という彼なりのマンマシン・システムに関する態度表明をしていると考えられる。その態度は「必然性」に偶然を、「確実性」に「確率」や「期待可能」性を置き換えるのは機械ではなく人間の行為である、というものだ。

一方、頼木と勝見博士の「予言機械」に対する態度が異なるのは、この機械の予測結果に対する信頼に関するものだった。言い換えれば、プログラミンングのプロである博士は機械をあくまで道具と捉

え、自分には予測結果を却下する自由を有すると考えるのに対し、頼木は結果の「必然性と確実性」を信頼し、それに依拠しながらもその変更可能性を考慮するという立場を採る。勝見博士が道具から自由と考えることに對して、頼木には「予言機械」の予測からの揺らぎやブレのような実践の自由度が残されるだけである。

このような頼木の態度を明確にするために、ヴィレム・フルツサーの「機能従事者」(Funktionär / 公務員、役人の含みもある)という概念を導入してみたい(同『写真の哲学のために』参照)。フルツサーがモデルとする機械はカメラであり、その言葉がコンピュータを思わせる「プログラム」という語によって説明されるものの、彼の用いる「プログラム」はコンピュータ用語のそれより広く、予め決められた進行の順序や組み合わせを表す一般的な意味である。それでもこの語に注目したいのは、フルツサーが「機能従事者」においては、機械は「装置」となるという指摘である。「機能従事者」と「装置」の関係をカフカの作品における官僚機構のよう捉えるフルツサーから見れば、勝見博士は機械を対象とする十九世紀的な近代的主体の態度であり、頼木は二〇世紀の高度産業社会における主体の態度として捉えられるだろう。

フルツサーは「写真装置」を「労働のロボット化と人間を遊びへと解放することの実例」と述べ、この「装置」に二つの「プログラム」を確認している。

ひとつは装置を自動的な画像制作へと動かすプログラムであり、もうひとつは写真家がゲームをすることを許容するプログラ

ムです。その背後には、さらに多くのプログラムがあります。写真装置をプログラムした写真産業のプログラム、産業領域をプログラムした社会・経済的な装置のプログラム、などなど<sup>1)</sup>があります。もちろん、「最終」装置の「最終」プログラムというものはありません。なぜならどのプログラムも、プログラムされるための上位のプログラム(メタ・プログラム)を必要とするからです。プログラムのヒエラルキーは上の方に向かって開かれていくのです。

どのプログラムもメタ・プログラムの関数<sup>2)</sup>機能のなかで動作するのであり、あるプログラムを組む人間は、このメタプログラムの機能従事者(Funktionär)になります。とすると、装置の所有者という場合でも、それは人間が装置を自分独自の個人的な目的のためにプログラムするという意味あいではありません。というのは、装置は機械ではないからです。

(同「Ⅲ 写真装置」)

目の前にあるカメラが道具でなく「装置」なのは、「装置」に「最終」の所有者がなく、「プログラム」を遡行すれば「メタプログラム」の階層を無限に上り続けるからであり、それゆえ「プログラム」は「装置」を動かし(「プログラム」を実行し)、あるいはその「機能従事者」のゲームを許容する(人間の実践による自由度を与える)、という二種で事足りるとされる。このシステムを「予言機械」と頼木の間起こるマンマシン・システムに援用し、「プログラム」を機械制御のための手続きというコンピュータの文脈で用い、「予言

機械」を「装置」と仮定すると、興味深い関係が見えてくる。一見「機能従事者」は勝見博士も含めて頼木や和田ら研究員に限られるように見える。だが、「予言機械」のある室内では常に音声入力が可能なのだから、録音スイッチがオンになっている時間内では、プログラム「カード」を入力する者だけが「機能従事者」ではないということになる。少なくともこの部屋に出入りする関連部署、すなわち政府側のプログラム委員会の岡安や水棲胎児を実験する山本博士にも適用範囲が拡大可能な「装置」となりうる。

一方、勝見博士に対する「君が自由にふるまおうとしてみたところで、いざれおれの中に予定されているプログラムから、一歩も出られない」という「予言機械」の言葉が真なら、極端にいえば、博士がプログラムを作る段階もその内容も「予言機械」のプログラムに書き込まれていることになる。フルッサーにおける「装置」は「機能従事者」の側から検討されるゆえに「上の方に向かって開かれ」ているが、「予言機械」の側から辿ればこの「装置」は無限のループを描いていることになる。

このループを念頭に、「予言機械」の側から勝見博士以下の関係者たちを捉え直すことが可能なら、彼らは自由を保持する近代的主体や「機能従事者」の区別なく、すべてがソフトウェア（プログラム）を実行するソフトウェア（プログラム）、言い換えれば「肉體がない」「予言機械」の代理者、すなわちエージェントとして捉えられるといえそうだ。そして、さらにこの仮定から出発して先に進むなら、「予言機械」の監視と管理の中にあるこの行為主体（エー

ジェント）は、その仲介的役割という性質によって、プログラムを組む側にもプログラムの実行によって導出された結果を行為に移す側にもなりうる存在となる。確かに「機能従事者」としての和田勝子は「質問」を作り出せない「予言機械」を語ることで「質問者の能力」を問題にしたが、自らが「装置」の一部であり、「予言機械」にとって人間は「質問」を作るソフトウェア（プログラム）にすぎないという点には無頓着だった。一方、「予言機械」にとって、登場人物たちは、他の夥しいデータと共に複数のエピソードやパターンの束としてデータ化され、その「論理」傾向も計算されており、そこから導出される予測の範囲内で行為しているのである。

### おわりに

『第四回水期』を「論理」の側から読むと、機械を道具として扱う自由な主体と「装置」として扱う管理された「機能従事者」による二つの「論理」が抽出できる。だが、重要なのは「予言機械」にとつて両者共に自分のプログラムを実行するためのソフトウェアまたは仲介的代理者に過ぎないという点にある。

人工知能に囲まれた読者の実際世界に及ぶテーマが約六十年前に書かれたこの作品にもし存在するとしたら、この作品を最初に読むとき、それはまず書物のページを捲るごとに印刷されたページ番号が加算される直線状の時間と異質のものとして、読者の実際世界に齟齬をきたすかたちで現われるからだろう。だが、「予言機械」な

る設定が読者にもたらずものは何かという問いに答えるには、そのような時間への問いに拘泥することなく、さらに、マンマシン・システムにおける主体の非人間化、「装置」化に目を向ける必要が出てくる。それゆえ、この作品のテーマは二つの問いを読者に投げかけているように思われる。なぜなら、主体を人間なる近代的概念に留めて捉えれば、管理されコントロールされた読者の実際世界が間われ、主体の非人間化として捉えれば、それはソフトウェアを实行するソフトウェアとなる（ヒト―有機体）とも呼ぶべきもの（それが仮に「私」と眩くことがあるとして）としての読者自身が問われるからである。

花田清輝はこの作品に作者の「思想的な動機」を見出したが、この作品の最後に配した作者の「あとがき」がその判断を可能にしたのは確かだろう。だが、この「あとがき」の存在は、むしろ作品内にも登場することで「あとがき」自身に明記される「日常的連続感」が、読者だけでなく作者や花田の実際世界にも及ぶことを示している。だれもが多少は自由な主体となり、多少は機能従事者となり、そして仲介的代理者となる。だが、それは「予言機械」という決してなることのかなわぬ「装置」の一部となることによって可能だからではないだろうか。

この作品発表後に、ガガーリンが大気圏を脱出した時期の座談会で、SFの消滅を危惧する作家が多い中、安部公房は宇宙船が生命を維持して飛ぶことに注目している<sup>(2)</sup>。完全なコンピュータ管理の中で生命維持される（ヒト―有機体）が、この機械に何かを指令する

にもコンピュータ・プログラムの範囲内であり、自らがソフトウェア化した行為が主体であることに対して、安部は、作家はプログラムする側になるべきだと述べた。一方、その行為すら刻々と休みなく膨大なデータを入力し、（ヒト―有機体）の思考を先取りする「装置」の想定内にあるような仲介者としての主人公を前提とした世界が描かれるとき、（ヒト―有機体）に関する別の可能性への示唆が『第四間水期』に描かれているのも確かである。すなわち、登場人物たちが手放さなかつた人間なる概念を変えることである。水棲人間の「論理」と態度の検討が、まだ残されている。

#### 〔注〕

- (1) 未来学者レイ・カーツワイルはその著書『ポスト・ヒューマン誕生』(二〇〇七・一 NHK出版)で、ゴードン・ムーアのトランジスタのべき乗的進化を念頭に自ら「収獲加速の法則」(The Law of Accelerating Returns)を立て、IT技術が人間の脳の演算速度を超える時期を二〇四五年と設定し(その後さらに早まるという予測を発表するが)、そのナノ化の傾向がバイオテクノロジーに及んで、人間の内部に人工知能搭載のナノボットを泳がせる時代が来れば、人間の歴史は人間と機械の歴史に書き換えられるという予測を打ち出した。その過程で、人工知能に代替できる職業から人間は締め出されるという推測も生まれ、資本主義の停滞時にさらなる不安を引き出す論調とその批判を生み出している。
- (2) マンマシン・システムは人間と機械が互いを補うような調和のとれたシステムという意味もあるが、ここでは端的に人間と機械の関係という意味で用いる。

- (3) 安部が実際に見学したのは日本が独自に開発中だったパラメトロン型の電子計算機「MUSASINO-1」であると言われている。その写真は、『日本現代文学全集 一〇三 田中千禾夫・福田恆存・木下順二・安部公房』(講談社 一九六七・一〇)にあり、『第四間水期』のため、日本電信電話公社にてコンピュータの取材写真(一九五九年)というキャプ

- シオンが付されている。
- (4) 拙論「電子メディア時代における異化——一九六〇年前後の安部公房のテレビ脚本・SFから『砂の女』へ」(『日本近代文学』第八三号 二〇一〇・十一) 参照。
- (5) 物語内で和田勝子が発話する「断絶」という言葉と作者「あとがき」の「断罪」という言葉は、花田が言うように作者の「思想的な動機」を作品に強く反映させようとした痕跡と捉えることは可能だ。和田が「プログラムカード No. 1」と「プログラムカード No. 2」の物語世界の外にあるはずのエピグラフを復唱する点からも、そのように解釈される傾向を無視できないのは確かである。
- (6) ここでの「推理」と「論理」は、論理的な推論という意味において同等の意味で扱われる。例えば『三人の記号 デュパン、ホームズ、パース』(ウンベルト・エーコ他 小池滋監訳 東京都書 一九九〇・四) における推理小説の分析においての「論理」のタイプを抽出する際に「論理」とする用例に拠っている。
- (7) マリア・ニコニヴァ『シャーロック・ホームズの思考術』(日暮雅通訳 ハヤカワノンフィクション文庫 二〇一六・十二) では、認知科学の側から人間の思考の様々なバイアスをホームズの推理だけでなくワトソンの推理の特徴として取り上げ、読者にとって身近に起きるバイアスを、特に「ワトソン・システム」として一括して検討している。
- (8) 安部が視察したパラメトロン型コンピュータについては財団法人C&C振興財団『コンピュータが計算機と呼ばれた時代』(ASCH 二〇〇五・十二) のトランジスタ以前のコンピュータに関する第3章「日本生まれの「パラメトロン」でコンピュータがつくられた」の中の「最初のパラメトロン型コンピュータ MUSASINO-1」を参照。
- (9) 荏部が時代の雰囲気伝えると述べた人工知能研究については、アメリカのメイシー会議を中心としたノーバート・ウィーナーらのサイバネティクス研究があり、その雰囲気伝える資料としてはステイヴ・J・ハイムズ『サイバネティクス者たち アメリカ戦後科学の発見』(忠平美幸訳 朝日出版社 二〇〇一・一) を参照。なお、安部のSF作品とサイバネティクスとの類似性については萩堂志野「ラジオとしてのロボット——安部公房「R 62号の発明」論——」(『續』二九号 二〇一七・三「續」の念) を参照。
- (10) フルッサー「写真の哲学のために」(深澤雅文訳 勁草書房 一九九九・二) 参照。フルッサーは「機能従事者」の側から「装置」との関係を検討するが、『第四間水期』においてはこの「装置」は音声出力によって「機能従事者」に語りかけることが可能になゆえに、「装置」の側から「機能従事者」との関係を検討することが可能になると思われる。
- (11) エージェントについては、代理者、仲介者、ソフトウェアまたはプログラムを実行するプログラムという一般的な意味で用いている。
- (12) 日下実男・手塚治虫・原田三夫・星新一・福島正実「SFは消滅するか」(座談会 一九六一・八『SFマガジン』八月号) 参照。安部は「機械、ことに計器類がそこまで精密化されるということ、これがわれわれの予測を越えたことなんで、そういうことになにか慄然たるものを感じますね」と述べている。
- (ながの ひろし 本学非常勤講師)



